教育企画推進部 News Letter
Curiosity
2026.10.9　Fri.　Vol.22

人文・数理探究類型
英語プレゼンコンテスト

吉井　謙太郎

6月のポスターセッションに引き続き、7月17日（金）午後に英語プレゼンテーションコンテストを実施しました。今年度は会場の都合により東灘区文化センターうはらホールでの実施となりました。3年間の探究活動の集大成にふさわしい、充実したプレゼンテーションが繰り広げられました。

＜審査結果＞

1st Prize & Audience Award: Group H
Designing Eco-Friendly Plastics Made from Milk　—The Effects of Acids on the Properties of Casein Plastics—
2nd Prize: Group F
The Effect of Lye on Laundry in the Edo Period
3rd Prize: Group B
Does Pollen Type Affect the Appearance of the Pollen Corona?

＜発表者（3年生）の感想より＞

・英語で自分たちの探究について分かってもらうために、楽しんで聞いてもらうために、班で話し合い、できる限りの工夫をできたと思います。また、補足となるスライドの準備や質疑応答の練習をたくさんできたのもよかったです。今後の論文作りでも、簡潔に分かりやすく伝えることを心がけていきたいです。

・日本語ではなく、慣れない英語で発表するからこそ、適当に飛ばしがちだったことに意識を向けて取り組むことが出来て良かったです。プレゼンには喋る場所ではなく相手に伝える場所だとよくわかったので、今後相手に何かを伝えるときは、相手の目線に寄り添って伝えていきたいと思います。

・質疑応答ではただ答えるのではなく、相手がどこを知ろうとしていて、理解のためにどのようなアプローチで説明すべきかを瞬時に判断して応答する重要性が実感できた。これは英語のみならず、普段の発表や対話でも大事になるポイントだと思うので意識しながら活用していきたい。

また、今回より「探究活動を通じた質問・対話力を向上させる」取組の一環として「生徒同士による質疑応答」の形式をとることとしました。従来は指導助言者であるALTが質問をする形式でしたが、今回からは生徒が英語で質問をし、それに発表者が答える形式を採用しました。

さらに、生徒同士での質疑応答を活発化させ、より探究の深まりにつながる質問を考えてほしいという狙いから、優れた質問をした生徒を「Best Interviewer」として選出し表彰することとしました。この審査はALTが行い、協議によって受賞者を3名決定しました。

＜1，2年生の感想より＞

・発表を聴き、質疑応答することにおいて相手の質問の意図を汲み取ることが難しいように感じました。また質問する時に慣れない英語での発表であるため、聞きたいことが伝わらず、困難に感じました。そこで相手に意図を確認しながら発表を進めることで、時間がかかったとしても確かに相手の意図を汲み取った質疑応答ができると感じました。

・3年生の発表を聞いて、来年の発表に向けてのイメージができたからよかった。今後の探究活動では自分の興味のある内容をさらに深めていく探究を行い、さらにそれを聴衆にも理解してもらえるような表現方法なども考えていきたいと思う。





五国 SSH 連携プログラム
「高校生のための減災復興学フォーラム」

山本　俊春



夏休み中の８月２９日（土）今回で４回目になる長田高校主催の防災減災に関心の高い高校生のためのフォーラムが開かれました。アドバイザーとして兵庫県立大学減災復興政策研究科教授の永野康行先生、長田消防署署長の大槻忠義氏をお招きし、昨年を大幅に上回る県内７校３３名の高校生、遠く仙台第一高校、米子東高校を含む教員１１名、兵庫県立大学の学生数名、長田消防署職員数名という総勢５０名を超える大人数で盛大に行われました。午前中は「減災復興学という学問の概要と高校生に期待すること」と題して永野先生の特別講義が行われ、午後からはアドバイザーのお二人によるトークセッション、それに続き参加生徒によるポスターセッションが行われました。それぞれの生徒の研究成果の発表に対して助言者、参加教員、生徒から様々な質問が投げかけられ、一層理解が深まったようです。





＜参加生徒の感想より＞

・実際に東日本大震災を経験され、体育館で３週間寝た方のお話など、発表ではいくつもの参考になる質問・アドバイスをいただけて今後につながりそうです。同様に私の発表の下手さや質問力のなさが浮き彫りになってしまったと痛感し、個人的にこれらをどう改善していくか考えていきたいです。

大阪大学工学部研修

戸塚　剛

７月２８日（火）本校初の試みとして「大阪大学工学部研修」を実施し、2 年生の理系生徒 49 名が参加しました。本校 OB である家裕隆先生、中山健一先生、有馬健太先生（いずれも阪大教授）との温かいご縁により実現した特別なプログラムです。当日は最先端研究に触れる「ミニ講義」、実際の研究現場を体感する「研究室訪問・実験実習」、さらに本校卒業生との「OB・OG 座談会」が行われました。事後アンケートでは参加生徒の 97.4%が「満足」と回答し、「工学部が持つ研究の幅広さや社会とのつながりを知り視野が広がった」「先輩方のリアルな話を聞けて受験への不安が和らいだ」など、大きな刺激を受けた様子がうかがえました。 高校での学びが未来の研究や社会貢献へどうつながるのかを体感する貴重な機会となり、後輩にも強く勧めたい実りある高大接続プログラムとなりました。




京都大学研究室訪問

廣岡　力

類型生徒および一般生徒の希望者を対象に、京都大学の各研究室訪問を実施しました。8 つの研究室・研究所を訪問するため、7 月 22 日と 23 日の 2 日間に分けて実施しました。午前中は各班に分かれ、それぞれが希望する研究室を訪問し、研究内容の説明を受けるとともに、実験や観察などの体験活動に参加しました。また、研究者や大学院生との質疑応答を通して、研究の進め方や大学での学びについて理解を深めることができました。午後には京都大学総合博物館を見学し、貴重な資料や展示物に触れながら学術研究の広がりを学びました。最先端の研究に直接触れる機会となり、多くの生徒にとって進路や探究活動への意欲を高める貴重な経験となりました。



＜生徒振り返りより＞

・今回の京大訪問では心理学を研究している先生にお話を伺いました。文系の学問に触れる機会は貴重で、研究プロセスであったり、器具であったり、先生の実体験であったりを詳しく聞くことができてとても面白かったです。心理学といえども実際に人と対峙するだけでなく自分の気になる心理的な問題はなんなのか、又それをどのように解決していくのかということに理系的な側面を感じました。

・元々人間の錯覚や感覚などに興味があったので、実際に研究されている生の声や最新の研究を目の当たりにして、研究方法や内容、実験機械にとても興味がそそられました。自分の探究テーマを考えるうえでの視野が広くなったと思います。

企業訪問

廣岡　力

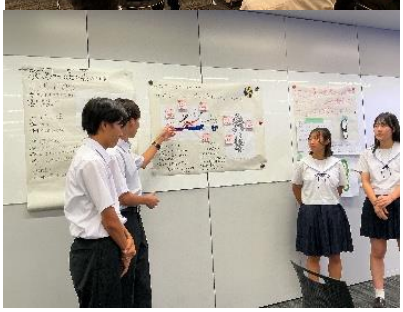
４つのグローバル企業での研修では、各企業が持つ技術や研究成果に触れながら、社会の変化や多様な課題に対してどのようなアプローチが行われているのかを学びました。実習や講義を通して、研究の意義や社会との関わりについて考える機会となりました。

（生徒振り返りより一部抜粋）

＜アシックス＞

・一つの製品を作るためには、人の分析から構造、材料そのものの研究までトライアンドエラーを繰り返していることがわかって、だからこそ使いやすく、人々から必要とされる製品ができているということがわかった。人々が心身共に健康であることを目指すポリシーに憧れた。





・普段何気なく靴を履いているけど、機能性についてあまりよく考えることはなかった。そこで、実際にグループワークで商品のモデルを考えてみて、その難しさから企業の努力がよく伝わった。アシックスだけでなく、他のいろんな企業の取り組みも知ってみたいと思った。

＜川崎重工＞

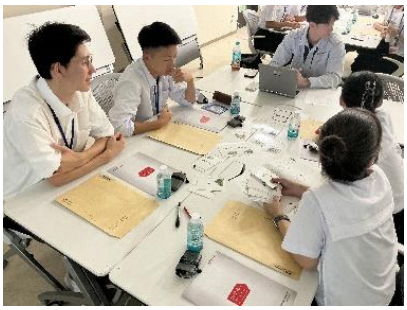
・ショールーム見学でロボットの動きと共に詳しく解説してくれたためとてもわかりやすかった。ワークショップも生成 AI を使うという新しいやり方で面白かった

・どのロボットにもそれにしかない技術などが沢山あり知らないだらけでした。是非来年も後輩にやってほしい。

・ショールーム見学では見たことのないようなロボットをたくさん見ることができて、面白かったです。また、



自分たちで新しいロボットを考えることで「ロボット」の定義を改めて実感することができました。



＜シスメックス＞

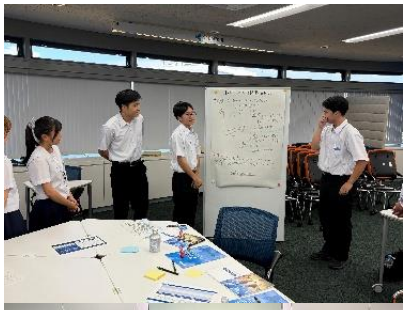
・医療機器を扱う会社として、安心安全のために、徹底したルールに基づいて、製品開発や販売が行われているのだとわかったから。研究者として、求められることを感じられた。

・普段見ることのないような施設を見学したり、企業のオフィスを見ることができてとても良い刺激になりました。

・普段は見ることのできない、企業の裏側を見ることができた。働く人々の様子や会社の製品にかける思いなどをよく知ることができた。

＜神戸製鉄所＞

・電気自動車の分解の展示などは確かにそこまでやるのかという驚きと発見があり、なにかの分野を専門にする上で様々な視点で研究してみることの大切さを学ぶことができたと思います。





・ワークショップに社員の方から直接自分たちの建てたプランに対して丁寧なコメントをいただけて実際の現場でおこる資金面や土地などの問題を詳しく考えることができた。

結（ゆい）プロジェクト 福島研修

米正　竜太

阪神淡路大震災の被災地である長田の経験や教訓を踏まえ、東日本大震災の復興現場を訪れ、災害・復興の現状を知ることで、防災・減災の観点から持続的な社会インフラや地域コミュニ



ティの可能性を探究することを目的に、結（ゆい）プロジェクト福島研修（9/12～13 福島県浜通り方面）が実施された。2 日間で 14 か所を訪問し、それぞれで対話・視察をこなすハードなスケジュールをこなした。参加者 7 名の生徒たちは、他では体験できない貴重な経験を積む中で、多くの問題意識と共に将来への希望も持ち帰った。

＜事後アンケートより＞

・ある物事には必ず表と裏があるというのについては 3 人の方が同じように語られていたことだと強く思いました。その地域の人たちが同じように体験する自然災害でも、立場も年齢も各々で、ある人が良かれと思っていることでも、別の方にとっては、最悪のことかもしれないからです。

・現地の方々の話し方や、声から伝わる震え、表情。これは現地へ行き、直接話を聞かないとわからないもの。(中略)、その当時の状況を知るためには必ず現地へ行くことが必要。本当の状況を知ることが、私たちはこれから何をしていくべきなのか考えさせられるきっかけになる。現地へ行くことを周りの若い世代に心からおすすめしたい。

・机上の知識と、実際に体験することとでは全く質が違うということを理解できたこと。教科書やネットで手に入れた知識だけで知ったかぶるのがいかに傲慢か痛感しました。

特別寄稿

Apa khabar?　From Malaysia

勝野　啓

第２話「マレーシアという国と、マラヤ大学」

第１話では、日本の大学を目指すマレーシアの学生たちの存在についてお話ししました。今回は彼らが暮らし、私が今暮らしている「マレーシア」という国と、舞台となっている「マラヤ大学」について紹介します。

・常夏の国と、時差の不思議

マレーシアは赤道のすぐ近くにある赤道直下の国です。そのため一年中「常夏」で、四季はありません。昼間は 31℃前後まで上がり強い日差しが照りつけますが、夜になると 23℃くらいまで下がります。湿気が高く寝苦しい日本の真夏と比べると、実は夜から朝にかけてはマレーシアの方がずっとしのぎやすかったりします。特に最近の日本では、40℃になるような日もあるため、日本の真夏よりは過ごしやすいと感じます。ちなみに日本との時差はたったの「1 時間」なので、日本が正午のとき、こちらは午前 11 時です。不思議なことに、マレーシアの首都であるクアラルンプールより日本に近いベトナムは日本との時差が「２時間」あります。なぜか気になった人は調べてみてください。こういったところにも、国の在り方の面白さを感じます。

・他民族、多文化が共存する街

また、マレーシアの一番の魅力は、なんといっても多民族・多文化が共存していることです。人口の約 7 割を占める「マレー系」、約 2 割の「中国系」、約 1 割の「インド系」、そして固有の先住民族など、多様な人々が一緒に暮らしています。街を歩くと、イスラム教のモスク、中国風のお寺、ヒンズー教の華やかな寺院、キリスト教の教会が並んでいて、まるで世界旅行をしているような気分になれます。言葉もマレー語（公用語）だけでなく、英語、中国語などが飛び交っています。学生たちも日常的に 2～3 つの言語を自由に操っていて、本当に驚かされます。「お互いの文化や違いを尊重し合って暮らす」という姿勢が、国全体に根付いていることは、マレーシアの特徴だと感じています。日本とは全く違う環境ですが、ここには若いエネルギーと、世界を広げてくれる刺激がたくさん詰まっています。

・マレーシアの最高学府「マラヤ大学」

そして、私たちがいる「マラヤ大学（University of Malaya）」は、マレーシアで最も古く、最も権威のある最高学府（日本でいう東京大学のような存在）です。緑豊かな広大なキャンパスには、優秀な学生が集まっています。私たちが指導している AAJ の学生たちも、このマラヤ大学のキャンパス内で毎日朝から晩まで過酷な予備教育に励んでいます。

次回は、そんなマラヤ大学で過ごす「AAJ の学生たちの毎日」にスポットを当ててみたいと思います。Jumpa lagi!（またお会いしましょう！）

編集後記

猛暑続きの夏もようやく終わり、夜には虫の声も聞こえてきて、秋の気配が感じられるようになりました。一方でネパールでの氷河崩壊による大災害をはじめ、日本各地でも想定外の大雨が相次ぎ、災害のニュースを聞くたびに、地球温暖化による気候変動の怖さを実感する機会が増えています。そんな中ではありますが、２学期も目の前のことにしっかり取り組んでいきましょう。